

Title	Civilizing America: Warrior and Citizen in August Wilson's Century Cycle
Author(s)	江戸, 智美
Citation	大阪大学, 2017, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/67090">https://hdl.handle.net/11094/67090</a>
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/resource/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/resource/thesis/#closed"〉大阪大学の博士論文について〈/a〉</a> をご参照ください。

***Osaka University Knowledge Archive : OUKA***

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 論文内容の要旨

氏名 ( 坂田智美 )

## 論文題名

Civilizing America: Warrior and Citizen in August Wilson's Century Cycle  
(アメリカを正すーオーガスト・ウィルソンのサイクル劇における戦士と市民)

## 論文内容の要旨

オーガスト・ウィルソンは20世紀のアメリカ合衆国におけるアフリカ系アメリカ人社会を、10年毎の時代設定に対して1作品という区切りで書き上げた。「20世紀サイクル劇」または作品の舞台にちなんで「ピッツバーグ・サイクル劇」と呼ばれる10作品は、従来の歴史において忘れられ声なき存在とされていたアフリカ系アメリカ人の物語を舞台上に提示した。ウィルソン作品は、かつて黒人文学の主流であった抗議文学とは一線を画していると言われる。一方で、ウィルソン自身は、同じアフリカ系アメリカ人作家で政治活動家でもあるアメリ・バラカ（元リロイ・ジョーンズ）を、多大な影響を受けた「4つのB」（ブルース、ロメール・ベアデン、アメリ・バラカ、ホルヘ・レイス・ボルヘス）に挙げている。1960年代に黒人芸術運動を率いたバラカは、アフリカ系アメリカ人を犠牲者として捉え、バラカの創立したブラック・シアターは、同胞に犠牲者としての現実を知らしめること、既存社会への攻撃的抵抗をめざした。

ウィルソンは、アフリカ系アメリカ人をそれまでの犠牲者というステレオタイプとして一括りにするのではなく、個人の生き方に焦点を当てて描く。しかし、アフリカ系アメリカ人としての怒りの炎が消し去られたというわけではない。ウィルソン自身が述べているように、1960年代の黒人芸術運動の中に身を置き、闘志を燃やしたことは確かである。その闘う意思をウィルソンは「戦士の魂」（warrior spirit）と呼び、サイクル劇には多くの戦士（warrior）が登場する。たとえば、ウィルソンに初のピューリッツァー賞をもたらした『フェンシズ』（1985）は、家族を養うために殺人を犯す登場人物トロイを中心に描く家族劇であるが、トロイは、ウィルソンのいう「社会の反対側にいる」典型的な戦士である。一般に、貧困と暴力問題はブラック・コミュニティにつきもの話とみなされ、トロイ、そして暴力的なトロイの父親もまたステレオタイプ化されたアフリカン・アメリカン家庭の家父長と捉えられる。しかし、ウィルソンは、ゴミ収集人として家族のために働くトロイの物語を前景化し、一人のアフリカ系アメリカ人の夢と葛藤を描くことで、単純なステレオタイプからの解放をめざした。白人主流社会が押し付けてきた「ブラック」に対する劣等意識を払拭し、アフリカ系アメリカ人それぞれが自己の存在意義を肯定し、自尊心をもち、責任ある一市民として生きることを促すのがウィルソンの目的である。本論文はウィルソンのサイクル劇における多様な戦士を考察し、かれらが常に社会の反対側にいる存在ではなく、市民もまた戦士の魂を求められることを示す。また、社会に抵抗しながら生き延びようとするアフリカ系アメリカ人の存在そのものに光を当てたウィルソンの劇作活動の意味を再確認する。

ウィルソンは、ドイツ系移民の父親ではなく母親からアフリカ系としてのアイデンティティを継承した。自分たちの過去を知らずして現在は存在しない。そう考えるウィルソンは、祖先の歴史、文化を舞台上に提示し、劇場を儀式の場とすることで、オーディエンスにもその疑似体験を提供する。ウィルソン作品にはアフリカン・アメリカンの特徴的な音楽やダンス、儀式などがふんだんに採り入れられ、コール・アンド・レスポンス、口承による語りなどアフリカン・アメリカンの文化が次々と繰り広げられる。ブルースによってアフリカ系アメリカ人の言語の重要性に気づいたウィルソンは、その表現豊かな「バナキュラー」を活かして舞台を身近なものに変え、観客は目の前で展開する物語が、まさに自分たち自身の物語であると捉え、追体験することができる。そうして過去を知り、記憶を共有することで、劇場を媒介として新たなコミュニティを生み出すことが可能となる。

第1章ではサイクル劇の最初に書かれた『ジトニー』（1983）を取り上げ、ウィルソンの戦士の原型を探る。まだサイクル劇の構想がない段階から、すでに戦士が登場していること、またウィルソンが、法、正義といった社会問題に強い関心を示していたことが明らかとなる。第2章はウィルソンが影響を受けたと述べた「4B」のうちブルースに関連する2作品『マ・レイニーのブラック・ボトム』（1982）および『七本のギター』（1995）を取り上げる。主人公のブルース・ミュージシャンが白人主導の音楽業界で成功をめざすが、黒人と白人との二項対立に終始せず、黒人コミ

コミュニティ内の衝突が描かれる。ブルースの歴史生成の過程で政治的な力が影響を及ぼしていることを確認する。また、従来のディスコースに対し、間接的に異議申立を行うウィルソンの姿勢を明らかにする。第3章では、『ジョー・ターナーが来て行ってしまった』(1984)と『ピアノ・レッスン』(1989)とを通して、生活の中から誕生した文化の維持、継承について考察する。前者は、コール・アンド・レスポンスによって表現される「骨の人びと」が圧倒的な存在感を示し、後者は幽霊と格闘する戦士を救うために、ピアノを用いて祖先の魂に呼びかけるが、こちらも祖先とのコール・アンド・レスポンスと捉えることができる。文化を奪還する戦士としてのウィルソン自身の劇作活動の意味を確認する。第4章はサイクル劇のブックエンドと呼ばれた2作品のうち『大洋の宝石』(2003)を分析する。シティズン(Citizen)と名付けられた若者が魂の浄化を求め、文字どおりCitizenとして生まれ変わるために、この作品で初めて舞台上に姿を現すAunt Esterが想像上の航海へと導く。シティズンは過去の記憶を手に入れたことで、ブラック・コミュニティの一員となり、戦士の使命を継承する。中間航路を経てたどり着く「骨の街」の幻想的なイメージがコール・アンド・レスポンスによって展開される。記憶を共有することで、コミュニティが強化され、また、生き延びることそのものが抵抗であると、アフリカ系アメリカ人の生そのものを肯定するウィルソンの主張がみられる。第5章では、サイクル劇の最終作品である『ラジオ・ゴルフ』を分析し、サイクル劇初の黒人中流階級の存在について考察する。アフリカ系アメリカ人の中で、社会進出、「アメリカン・ドリーム」の追求を実現できるのはまだ一部にすぎない。都市再開発プロジェクトを行う側に立ったアフリカ系アメリカ人と、未だ周縁で生きる同胞との対比が明らかである。市長候補のハーモンドは順法精神にあふれ、プロジェクトの手続にも気を配っていたが、過去を調査した結果、手続に瑕疵があったことが発覚する。ハーモンドはかつてAunt Esterが住んだ家の解体を中止しようと奔走し、古い友人でビジネスパートナーのルーズベルトと道を分かち、戦士のペイントを顔に描きオフィスを出てゆくハーモンドは、戦士の魂をもった新たな市民の誕生を意味する。

ウィルソンはこれまで語られなかったアフリカ系アメリカ人の物語を舞台上で展開し、記憶の共有を行う。「歴史は人の記憶である」というマルコムXの言葉どおり、アフリカ系アメリカ人の歴史を紡ぐために、まず過去を知り、記憶を継承してゆくことが必要である。そこから集合的意識が生まれ、コミュニティが誕生し、または結束が強化される。そして、それが一般の人びとのムーブメントにつながる。ウィルソンは、アフリカ系アメリカ人が「戦士の魂」を保ち、一市民、一国民として、自分の責務を果たすことを求める。それこそが、ウィルソンが描いた市民であり、アメリカを「正す」(“civilize”)ことを責務として負うものである。ウィルソンは、アフリカ系アメリカ人が生きてきた歴史を、白人至上主義のアメリカを正す営みであったと再定義し、サイクル劇を通して舞台上で視覚化したのである。

## 論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 ( 坂 田 智 美 )	
	(職) 氏 名
論文審査担当者	主 査 言語文化研究科教授 貴志 雅之
	副 査 言語文化研究科教授 渡邊 克昭
	副 査 言語文化研究科准教授 中村 未樹
	副 査 言語文化研究科教授 畑田 美緒
	副 査 言語文化研究科准教授 岡本 淳子

## 論文審査の結果の要旨

本博士号請求論文“Civilizing America: Warrior and Citizen in August Wilson’s Century Cycle”は、アメリカ演劇史上、最高峰のアフリカ系アメリカ人劇作家と考えられるオーガスト・ウィルソンの「20世紀サイクル」を取り上げ、そこに描かれる20世紀アフリカ系アメリカ人物語を「戦士」と「市民」に着目して分析・検討し、ウィルソンの劇作活動とサイクル創作の意義を再検証したウィルソン研究である。

「20世紀サイクル」は20世紀を10年の時代区分ごとに1作、全10作で描くアメリカ演劇史上類を見ない巨大連作劇である。サイクル研究において、「戦士」と「戦士の魂」(the “warrior spirit”)は必ず論じられるモチーフ、テーマであった一方、「市民」の考察が十分なされてきたとは言い難い。坂田論文の独自性は、この「戦士」と「市民」を統合した「戦士の魂を持つ市民」像を提示し、ウィルソンが語った“civilize white people”を援用してアメリカを“civilize”するアフリカ系アメリカ人のあるべき姿として、この市民像を打ち出した点にある。白人を“civilize”するとの見解を再考する必要がある。しかし、アフリカ系アメリカ人共同体の結束と人種的遺産の維持・継承を担う「戦士の魂を持つ市民」の姿を「20世紀サイクル」を特徴づける象徴的人物像として新たに示した坂田論文は、ウィルソンの劇作の根幹を見定め、体系化しようとした野心的な労作として評価される。

本論文は、序論と結論を含め全5章から構成される。序論では、劇作家ウィルソンの劇作理念・活動に影響を与えた「4つのB」(ブルース、ロメール・ベアデン、アミリ・バラカ、ホルヘ・ルイス・ボルヘス)に加え、1960年代の黒人芸術運動、ブラック・パワー運動の影響と、ウィルソンの人種意識にかかわる伝記的事実が要説される。そして、「20世紀サイクル」の検討を通じて作者ウィルソンの「戦士の魂」と彼の政治的メッセージを解明するという本論文の目的が示される。

第1章は、サイクル構想以前に創作され、後にサイクルに組み込まれる『ジトニー』(1982)を取り上げ、黒人親子ベッカーとブースターの中に「戦士」の原型を探るとともに、「戦士」像と関係する法と正義についてのウィルソンの意識を明らかにする。

第2章は「4つのB」のうちブルースに関わる『マ・レイニーのブラック・ボトム』(1984)と『七本のギター』(1995)の2作を取り上げる。黒人女性ブルース・シンガーと黒人男性ミュージシャンを中心に、白人と黒人の経済的人種関係の歪みが黒人コミュニティ内に殺人という人種内暴力をもたらすプロセスが精査される。それにより、黒人音楽ブルースの産業化における政治的力の介在と、既存の支配的言説の暴力的圧力を告発するウィルソンの姿勢を炙り出す。

『ジョー・ターナーが来て行ってしまった』(1986)と『ピアノ・レッスン』(1987)を取り上げる第3章では、アフリカ系アメリカ人の文化的遺産と人種的記憶の維持・継承問題を検討する。ブルースを人種的歴史と記憶の共有メディアとして措定し、そのブルース本来の意味と機能を回復する作品として『ジョー・ターナー』を位置づける。海底から浮上する「骨の人々」(“Bones People”)の幻影を考察し、アフリカにつながる人種的記憶が主人公個人の記憶の回復と新たなアイデンティの覚醒をもたらすプロセスを論証する。一方、『ピアノ・レッスン』について、家族の遺産であるピアノを巡

るアフリカ系アメリカ人姉弟の反目と白人亡霊に対する姉弟の共闘を中心に、一族の遺産を守る「戦士」の姿を再検討する。そして、戦士（弟）と戦士を支える女性（姉）、子孫の祈りに答える祖先、という一族の性別と世代を超えた絆を、その絆をつなぐコール・アンド・レスポンスに着目しつつ、人種的遺産を守り継承する戦士としての作者ウィルソンの姿と彼の劇作活動の意味を再検討している。

第4章はサイクル劇のブックエンドと呼ばれる2作品のうち1904年を舞台とする『大洋の宝石』（2003）を考察する。エスターおばさんが司るシティズンの「骨の町」への幻想航海を中心に、「骨の人びと」と「骨の町」の表象性、シティズンの罪の贖いと人種的記憶・意識の目覚め、「戦士」としての覚醒が精査される。そして記憶の共有・継承によるコミュニティの存続・強化と、生存することが抵抗であるとしてアフリカ系アメリカ人の生を肯定するウィルソンの姿勢を読み解いている。

第5章では、サイクルのもう一つのブックエンドである作品、1997年を舞台とするサイクル最終作『ラジオ・ゴルフ』（2005）を取り上げる。初の黒人市長候補の市長選と都市再開発プロジェクトを背景に、白人社会での成功を目指す黒人中産階級と人種的遺産を守る黒人低所得者層との軋轢を、現代アフリカ系アメリカ人コミュニティが直面する人種内対立が孕む問題として検討する。また離別した親族との邂逅による市長候補ハーモンドのアイデンティティの目覚めと、人種的遺産保存のために戦う「戦士の魂」を持った「戦士／市民」となる彼の覚醒に至るプロセスが精査される。

結論では、本論文の議論の総括と、歴史と記憶の継承によるアフリカ系アメリカ人コミュニティの結束の重要性が確認される。最終的に、不公正な扱いに対して敢然と立ち向かう「戦士／市民」として「アメリカを正す」（“civilize America”）アフリカ系アメリカ人の姿を標榜する劇作家ウィルソンのメッセージ表明をサイクル創作の意義として本論を結んでいる。

全体として読みやすい英語で書かれ、議論に大きな破綻もなく、アフリカ系アメリカ人と音楽の関係など周辺事情にも目配りがなされている。さらに上述した「戦士／市民」像の提示という独自性ある主張を導き出す議論を構築した点は、真摯な研究の成果である本論文の真価を示すものとして高く評価される。

しかし一方で、今後に向けて解決すべき課題として、以下の問題点が審査担当者から提示された。作品のプロット解説になりがちな議論が散見され、引用・言及している先行研究について批判的読みが不十分であり、結果として議論が先行研究の域を出ず、独自の議論を展開するまでには至っていない箇所があった。「戦士の魂」、「コール・アンド・レスポンス」、その他の用語の定義と考察が不十分であり、「市民」とは何か、その「市民」が属する共同体とは何を指すのかについても明確な定義がなかった。中でも、審査員全員が問題としたのは本論文題目となっている“Civilizing America”の意味と妥当性である。論者はウィルソンのインタビューを引用し、黒人に対する白人の扱いを“uncivilized”（野蛮な／非常識な）とする内容と“we’ve spent four hundred years trying to civilize white people”というウィルソンの言葉から、本論文題目を“Civilizing America”とし、日本語要旨で「アメリカを正す」と訳している。しかし、これでは白人よりも黒人の方が本質的に文明的であり正しいので白人の誤ったアメリカを是正する、という単純な本質主義として受け止められる危険性がある。これは論者がウィルソンのインタビューでの発言の端を捉えて、金科玉条的に解釈したことに起因する問題であるように思われる。これでは、ウィルソンのテキストを平板な図式に還元してしまい、ウィルソン作品に描かれる多様な葛藤や言説のダイナミックなせめぎ合いの場としての「テキスト」のあり方、そして彼のしなやかなドラマトゥルギーが見えてこない。その意味で、ウィルソンのインタビューでの言葉を作品に見られる彼の劇作のあり方に照らして、柔軟かつ批判的に捉える必要があったのではないか。また「文明化する／教化する／啓蒙する」等の意味がある“civilize/civilizing”の用語についても社会学、倫理学、政治学等の観点から考察する必要性が指摘された。なお、本論文題目の主題“Civilizing America”をメインタイトルとする書物、Dietmar Schloss, ed. *Civilizing America: Manners and Civility in American Literature and Culture* (Universitätsverlag Winter, 2009)があるが、本書はアメリカ文学・文化に関する文明研究であり、ウィルソンの劇作理念に由来する本論文題目の主題とは関係性のないものであることが確認された。

しかし、以上の指摘は、本論文のさらなる発展にとって重要な修正箇所を示すものであっても、本論文の学術的価値を減じるものではない。本論文は、巨大連作劇「20世紀サイクル」の作品群を綿密なテキスト分析と先行研究に関する知見、そしてアフリカ系アメリカ文化・社会・歴史的コンテクス

トを踏まえて考察・検討し、オーガスト・ウィルソンの劇作理念と劇作活動を丁寧に検証するとともに、独自性ある結論を導き出した包括的ウィルソン研究として十分評価できるものである。また、論者はオーガスト・ウィルソンを中心とするアフリカ系アメリカ演劇について日本アメリカ文学学会全国大会、日本英文学会関西支部大会等における6回の口頭発表において高い評価を受け、大阪大学『英米研究』でもウィルソン研究の論考が掲載されている。本博士論文は論者のこれまでの研究業績を反映するとともに、さらに進展を遂げた論者の研究能力の証左となるものである。

以上から、本審査委員会は総合的に判断した結果、全会一致で本論文が博士（言語文化学）の学位を授与するに値する研究であるとの結論に達した。